代地を通して見る名主支配に関する研究－「町鑑」を中心に－ A STUDY ON THE RULE OF THE TOWN HEADMAN THROUGH THE SUBSTITUTE LOT

李 佶 勲*
Kilhun LEE

The city of Edo was under the control of town headman. At first, it is assumed that one town headman was assigned to each town. Meanwhile, what kind of change was seen by the town headman's control when the ruled town was taken up and a substitute lot was given? The purpose of this study is to clarify what kind of expansion was achieved by having a town headman ruling a special town as a substitute lot. This study consists of two contents: 1. Considering about recognition to a substitute lot and a change of the town headman's controlled town from "Edo Chokan", 2. Considering about the town headman rule from the analysis of the type of the town headman rule, the expansion of the town headman rule and change in the town headman group by substitute lots. It became clear that through substitute lot, both the merchants and the town headman was able to expand.

Keywords: Edotown, the Original Lot, the Substitute Lot, the Town Headman, the Groups of the Town Headman, Chokan

江戸, 元地, 代地, 名主, 名主番組, 町鑑

1. はじめに

『御府内沿革図書』をみると江戸町中にはかなりの数の「代地」が存在する。「代地」とは公収された土地の代わりに与えられる土地のことであるが、いったん代地が与えられると、その土地は「○○（従来の町名）代地」と呼ばれるようになる。そして移転する前の土地という意味で、元地という観念がうまれる。

江戸の町は名主の支配を受けている。当初、名主は一町に一人宛置かれていたと思われるが、町数が増えることにより、支配する町数は増えていく。そのようななか、支配している町が公収され、代地が与えられる際、名主の支配には如何なる変化がみられるのか。名主が代地という特殊な町を支配することで、いかなる拡張を果たしたのかを明らかにするのが本稿の目的である。

本稿は代地への認識と名主支配町の変化を『江戸町鑑』から追究する三節と代地による名主支配の類型、名主支配の拡張、名主番組の変化の分析を通じて代地による「支配名主化」について考察する四節からなる。

江戸の代地に関する研究は乏しいが、名主に関する研究は多様に蓄積されている。名主に関する先行研究は制度的側面¹⁾と名主のあり方の側面²⁾で行われているが、史料の限界もあり、名主のあり方についてはまだ乏しい状態である。本稿では、このような研究成果をふまえた上で名主支配の実態を代地という新たな側面で明らかにすることを試みる。

2. 史料について

本稿で主に扱う江戸町鑑は、江戸の市政名鑑、あるいは市政要覧

としての性格を持ち、武鑑と同様に毎年のように改訂し、刊行された。大別すると、万世系、泰平系、その他の三系統に分けられる。内容は、町奉行所関係（町年寄を含む）の名簿、名主支配付（名主名とその支配町名）、町火消関係記事、町尽（町名小名・坂・橋・堀などの名寄）などである。江戸町鑑の原型は、元禄2年（1689）刊行の「江戸惣鹿子」³⁾に収録された名主支配付に求められる。名主支配付に、町奉行所関係の名簿を加えた市政名鑑として、享保14年（1729）に「万世町鑑」が刊行されたのが最初の江戸町鑑である。延享4年（1747）に町火消関係記事や町尽を加える大幅な増補改正があり、市政便覧、町名案内としての機能をもつ「万世江戸町鑑」が刊行された。文化4年（1804）にも改正がなされ、記載様式が整備された「増補改正万世江戸町鑑」が刊行され、幕末に至っている⁴⁾。

そのなか、本稿では代地が初めて記されている元文3年（1738）に刊行された『町鑑』と安永3年（1774）に刊行された『安永3年小間附北方南方町鑑』を取り上げながら、代地における名主の支配変化を考察する。

『名主役料書上』⁵⁾は、『旧幕府引継書』のなかにある記録で、名主について町別の役料が書かれており、名主がその支配する町々から受け取る役料高の書上げである。「上」は一番組より九番組までと番外の新吉原組が、「下」は十番組から二十一番組までと番外の品川組が記載されている。『旧幕府引継書』の目次には安政以降のものであると書かれており、かつ『名主役料書上』のなかには、卯年と書かれていることから安政2年（1855）と推定できる。

3. 『江戸町鑑』からみる代地

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
博士課程・大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo, M. Eng.

3-1. 代地への認識

江戸市中には町政を担う者として、二百名を越える名主が存在した。名主は、町方支配の中では末端に位置し、三人の町年寄から指示をうけて、町々の支配を行う立場であった。このような名主とその支配町名が記されている町鑑は名主番組が編成された享保七年以後から存在する。享保14年(1729)に『万世町鑑』が最初に刊行され、その後何回か改正されている。本稿では元文3年(1738)と安永3年(1774)の町鑑を用いて、代地について考察する。

名主番組が編成してから最初の町鑑である享保14年の町鑑には「代地」という言葉が書かれていない。町地が収公され代地が与えられたのは早くは元禄から行われ、町鑑が刊行された享保14年には、すでに火除地整備のために頻繁に与えられたはずの代地が見当たらないことは如何なる理由であるのか。

享保18年に刊行された町鑑では何箇所かの「代地」が見られるものの実際の代地の数には及ばない。本稿で分析の対象にしている元文3年分にも「代地」はほとんど登場していない。宝暦7年に刊行された『万世江戸町鑑』には「代地」が徐々に増加することが確認できる。『東京市史稿』により代地が与えられた年度を確認した結果、享保14年にはほとんどの代地が与えられたにもかかわらず、町鑑に記されていない理由として、以下の二つの可能性が挙げられる。一つ目は、実際は与えられた代地に全部は移さず、管理するほどではなかったという可能性、二つ目は、代地に移したことは事実であるが、実際には元地と一つの町として扱われたという可能性である。『安永三年小間附北方南方町鑑上』によると神田佐久間町1丁目は「右元地ニ相離候儀町人共一同難儀仕候ニ付、有来間数右裏行之内河岸元地江拾間通御割替奉願候儀ニ御座候得者」⁶⁾とあり代地が河岸より隔たり、不便であるという理由を挙げつつ、代地と元地での10間を取り替えようと願い出たことが読み取られる。以上の史料から実際、代地に移したことが確認できる。おそらく、代地に移したが元地と一つの町として扱われたという可能性が有力であるだろう。それが徐々に一つの町として独立し、元地と代地という二つの町に分かれていく状況が窺える。『町鑑』で町によって代地が異なる時期に現れた事実から、代地が一つの町として扱われた時期も町によって異なっていたことが推測できる。

3-2. 名主支配町の変化

本項では『町鑑』に代地が登場しはじめる元文3年に刊行された『万世町鑑』と『安永3年小間附北方南方町鑑』を取り上げながら、名主支配町の変化を検討する。

吉田氏は、江戸初期から中期にかけて、名主の性格が変化することを、町制機構の変化と関連づけてとらえ、これを「町の名主」から「支配名主」への変化と位置付けた⁷⁾。本項では、このような元禄期(1690年頃)に発生した「支配名主」がその後、安永まで自分の支配領域をいかに増加していくかを考察する。元文3年(1738)と安永3年(1774)の『町鑑』を比較すると、名主の支配領域の増加には、町数の増加、面積の増加、それにとまう収入の増加などが挙げられる。

1) 不在名主化による支配町々の増加

吉田氏は町の名主から支配名主への展開を以下の二つの理由で説明している⁸⁾。一つ目は、町中の代表である町の名主を選定しようにも、町内には母体となるべき町人がごく少数しか居住しておらず、

町中の自治権限の多くは、事実上「支配名主」に委任されることになる。二つ目は、職人町において当初の職人組織と町共同体との結合というあり方が解体するなかで、職人頭が「町の名主」であった体系が消滅される。このような二つの理由により、不在化された町々の支配は近隣名主へ「支配付」となり、名主の支配町は拡大されることになる。

2) 寺社奉行支配の町々の町奉行への編入

片倉比佐子氏の研究によると、寺社門前町々は寛文2年(1662)に町奉行支配への組み入れが公布されたが実施されなかったことや、町奉行支配に入った時期は地域によって異なっていたことが指摘されている⁹⁾。たとえば、伝通院領には多様な場合があつて、慶長17年(1612)に町起立が認められて明暦3年(1657)に町奉行支配となったところ、元和9年(1623)伝通院領となり、明暦大火前に町屋許可、延享2年に町奉行支配となったところ、元文2年(1737)町屋許可、延享2年町奉行支配になったところが存在する。つまり、伝通院領をみても、寛文2年の町奉行支配への組み入れの触と実際の支配体系は異なっていたこと、それが一括に行われず、何段階にかけて地域ごとに異なることがうかがえる。それが、結局延享2年(1745)には大小の門前町が寺社奉行とともに町奉行の支配をうけることになる。このとき、町奉行支配に組み込まれた寺社奉行支配の町々、寺社門前町は445町にのぼる¹⁰⁾。このように寺社奉行支配の町々が町奉行支配へ組み入れることは「名主支配」が拡大することにつながる。

3) 代地による支配領域の増加

元地の一部分として扱われた代地が徐々に一つの町として支配対象になる。

代地の基本パターンである元地の一部分が収公され、残った元地と収公された一部分の代地で構成するパターンを考えてみよう。代地は基本的に収公された元地と同じ面積であるため、支配面積には変わりはなく、支配町の数のみ増えるはずである。しかしながら、代地はまた変形的な都市空間を引き起こしながら面積を増やしていることが窺える。

図1 佐久間町四丁目の空間構成¹¹⁾

『安永三年小間附北方南方町鑑上』に記されている佐久間町四丁目の例を検討すると代地からもたらされる蔵地が窺える。

「右佐久間町四丁目元地之儀者、享保三戌年已前迄者柳原土手下ニ有之候町屋ニ御座候処、同年類焼ニ付火除地ハ被召上、代地柳原土手内ニ而被下置候得共、元地相放レ難

儀仕候ニ付、其後蔵地ニ御願申上候地所ニ御座候、」¹²⁾と書かれていて、佐久間町の町人は河岸地で材木にかかわる仕事¹³⁾に従事していたため、河岸がある元地と隔てていることに不便を訴え、元地の八間通りを蔵地として許可される。また「右四丁目残地之儀者、享保三戌年類焼之節焼残り候ニ付、類焼之場所計切地ニ代地被下置、相残り候地所ニ御座候、」¹⁴⁾とあるように、焼け残った部分を残地として、「右佐久間町四丁目裏町之儀者、(中略)其後右家主共御願

申上候町屋地尻ニ而、又候元地借元店之者も一同御願申上被仰付候
地所ニ御座候、」¹⁵⁾とあり、元地から隔てていることに不便を訴え
たことで、蔵地として許可される。佐久間町四町目においては佐久
間四丁目元地、佐久間四丁目裏町、佐久間四丁目代地、佐久間四丁
目残地があり、元地と裏町は蔵地で、元地は上納金を、裏町は公役
金と上納金を納めている¹⁶⁾(図1)。ここでは、元地が残地以外には
全部類焼し、代地が与えられる時点で、同じ面積になる。しかし、
火除明地になっていた元地の一部分を蔵地として使用が許可され、
その後、また裏町といって蔵地として使用が許可されたことで、面
積は前の元地よりはるかに上回ることになる。この蔵地というのは
明地が変化しただけで土地は幕府の所有であり、管理は名主が行う、
上納金を納める土地である。つまり蔵地というのは代地から生じた
場合が多いことが読み取られる。

また、『御府内備考』に記されている佐久間町一丁目を検討すると
代地がもたらした上納地の存在が窺える。「享保一九寅年三月廿八日、
町内河岸通町屋奥行短く辨利悪敷候ニ付、是迄拝借裏行三間通の上、
三尺増地被仰付、三間半通拝借地ニ被成候様、尤上納金差上可申旨
奉願、」¹⁷⁾と書かれており、河岸通り町屋の奥行が短いため、上納
地として増地願い出て許可されたことが確認される。

佐久間町の空間構成の変化による名主支配の変化については、代地
および代地から生じた上納地や蔵地も同名主の支配を受けているこ
とが確認できる¹⁸⁾。以上のように火除明地のために収公され、与えら
れた代地に移った町人は出願により徐々に自分の領域を拡張してい
る。それにともない、名主の支配町も増えている様子がうかがえる。
4) 拝領屋敷による支配領域の増加

町中の拝領屋敷は誰が拝領したものであるのか。『撰要永久録』公
用留¹⁹⁾の松川町二丁目に与えられた拝領屋敷の拝領者は坊主になっ
ている。この史料には拝領の訳は書かれず、与力、同心、五人組、
名主立合いのもと行われたという引き渡しの過程が書かれている。
『安永3年小間附北方南方町鑑』と『名主役料書上』をみると、拝
領屋敷は公役金を出して、名主役料も町に比べると少ないが出
していたことがわかる。

おそらく拝領屋敷は町地が拝領屋敷にかわる変形で、その拝領者
も町人ではなかったのではないかと推測される。しかし町と同様に
公役金と名主役料も出していることから名主の支配町の増加にはな
ったと考えられる。

5) 買上地による支配領域の増加

『安永3年小間附北方南方町鑑』には二ヶ所の買上地があり、松下町
代地、塗師町代地、新銀町代地の三町にまたがる買上地と麴町平河町一
丁目代地に隣接している買上地である。松下町代地、塗師町代地、新銀
町代地の買上地は、左三町代地の裏通りにあった明地で、三町家主が願
い寛延元年(1748)に買上地になった²⁰⁾。また麴町平河町一丁目代地続
き買上地は明地であったが、寛延元年構地届により、町内の者が落札し、
本町の買上地になった²¹⁾。両方とも公役金を納めている。買上地が偶然
に代地と絡んだ可能性もあるが、収公により与えられた代地の町人が明
地の使用を訴えてくると認めていたことが考えられる。

以上のような五つの支配町々の増加原因のなかで、代地と関連があるよ
うに見えるのは、代地による増加と買上地の増加である。ここで興味深い
のは可変的な明地が生み出す様々な変形的な都市空間である。このように
町人は明地の性質を変えながら自分の領域を拡張していることがわかる。

4. 代地と「支配名主化」

4-1. 代地における名主支配の類型

町地が取り上げられ、代わりの代地が与えられる際、代地の名主
支配はどうなるのか。代地が近隣に与えられた場合は元地の名主の
支配下になるが、遠距離の場所に与えられた場合は如何なる支配変
化がみられるのか。表1のように類型化すると、元地が一部収公さ
れるパターンと元地が全部収公される二つのパターンがあり、それ
ぞれ与えられた代地を元地の名主が支配する支配継続パターンと他
名主に支配が変わる支配変化パターンがある。

1) 元地の一部が収公され、同じ元地の名主が支配する支配継続
パターンが一番多くみられ、259ヶ所の代地のなかで129ヶ所とな
っている。これが元地と代地の基本パターンで距離が隔たってい
ても代地は元地の名主が支配する。

2) 元地の一部が収公され、他町の名主の支配に置かれる支配変
化パターンは50ヶ所みられ、全体の1/4を占めている。これはまた
三つのパターンに分類できる。一つ目、距離が隔てられていても最初は
元地の名主の支配下であったが、徐々に代地の近隣の名主支配下に
置かれる場合、二つ目、複数の代地らが集まって新しく町を形成し、
最初から近隣の新しい名主支配下に置かれる場合、三つ目、町名が
<元地名>+<代地>ではなく、<代地が与えられた地域名>+<
元地名>で、例えば、銀町の代地であるが、銀町代地ではなく、代
地が与えられた地名を入れ、靈巖島銀町と名付け、別の名主支配下
に置かれる場合である。

3) 元地の全部が収公され、元地は無くなり、代地のみ存在する
なかで、代地は従来の名主が支配する、代地のみの支配パターンは
60ヶ所みられ、1/4を占めている。この類型も一般的で、距離が隔
てられていても基本的には元名主が支配をしつづける。

4) 元地の全部が収公され、元地は無くなり、代地のみ存在する
なかで、代地を他町の名主が支配する、支配変化パターンは11ヶ所
でほとんどみられない。これは距離が隔たれていて最初から他町の
名主下に置かれた例が多い。

このように代地が発生することで、名主支配は24%が変化を起こ
している。なかには最初から他町の名主下に置かれた場合もあれば、
徐々に不便により他町の名主に預ける場合もある。名主が町を支配
するには確かに距離は重要であったが、「当地者地所隔り有之候ニ付
別段ニ諸事相勤候得共、」²²⁾と記されていて、大半は隔てられても
代地を支配しようとする意志が強かったことが読み取られる。

表1 代地による名主支配の類型化(名主未詳は数に含まれていない。)

区分	同名主の支配	他名主の支配
元地の一部が収公される	129	50
元地の全部が収公される	60	11

*. 259ヶ所という代地の全体数値及び表に算出された数値は、江戸全期
において与えられた代地を『安永三年小間附北方南方町鑑』を基準にして、
『御府内沿革図書』と『東京都市史稿』で補いながら拾った数である。

4-2. 代地による名主支配の拡張

3-2で考察したように町人は代地を用いて土地を拡張していた。
土地の拡張のみが目的であったというよりは、元地を確保すること
が狙いであったが、結果的に土地は拡張されていた。個人である町
人は自分の町地を確保していたが、町々の代表者であり、支配者で
ある名主はどうであったのか。支配領域の拡張は支配者にとって果

たしてプラスになることであったのか。代地を用いて「名主支配切」の拡張を図っていたのか。

以下の二人の名主を例として挙げながら、名主支配の拡張を領域と収入の二つ面で検討したい。以下の分析は元文3年（1738）と安永3年（1774）の『町鑑』に基づき行いました。

1）他町の代地を通じた拡張

四番組の名主である星野又右衛門（以下、又右衛門）の支配町々は『元文3年町鑑』には檜物町、同会所、上横町、同会所、同新道、祐口屋敷、道寿屋敷と記されている。それが、『安永3年町鑑』には檜物町、同会所、上横町、三嶋屋敷、道寿屋敷、数寄屋町、御油屋拝借地、北横町拝領屋敷横山当永拝借地と支配町が増えている。なお、万町、元四日市町、日本橋蔵屋敷、青物町も本来は又右衛門の支配であったが、両史料では又右衛門の支配から抜けていることがわかる。その過程は不詳であるが万町、元四日市町、日本橋蔵屋敷は一番組の品川町の名主六右衛門の支配に、青物町は四番組の西河岸町の名主清右衛門の支配とされている。支配名主が変わった時期は不明であるが、『町鑑』が初めて発刊された享保14年（1729）の以前であることは確かである。

増えた町々を確認すると、三嶋屋敷、道寿屋敷、数寄屋町、御油屋拝借地、北横町拝領屋敷横山当永拝借地で檜物町の北側の広小路が町地になる際、方位で左側半分が又右衛門の支配になった。そのなか数寄屋町は数寄屋橋南側にあった町であったが、元禄年間²³⁾に一帯が火除地として収公され、その代地が当地に与えられた。元地が収公され代地が与えられる際、近隣の名主である又右衛門の支配に置かれた例で、又右衛門からみると他町の代地を用いて拡張を図ったと考えられる。しかし元禄期に与えられた代地が40年後である『元文3年町鑑』に記されていないのはどのように説明できるのか。数寄屋町の隣にある道寿屋敷は記されていて、数寄屋町や三嶋屋敷が記されていないのは、記載もれとは考えにくい。3-1で考察したように、元文の時点で数寄屋町はまだ元地と一つの町として扱われ、元地の名主の管理下にあったと思われる。

表2 名主星野又右衛門の名主役料²⁴⁾

支配町名	小間間数（京間・田舎間）	役種類	名主役料
檜物町	京間 百九拾四間壹尺九寸	国役	金三拾六兩貳分壹朱
同会所	京間 拾六間三尺	公役金	金貳兩貳分三朱
上横町	京間 百八拾六間壹尺貳寸五分	公役金	金貳拾壹兩貳朱
増加分			
北横町	京間 六間	公役金	金拾三兩貳分壹朱
三嶋屋敷	京間 貳拾三間三尺五寸五分	公役金	金五兩壹分
道寿屋敷	京間 拾間六尺貳寸	公役金	金三兩貳分壹朱
山添屋敷	京間 六間	公役金	金壹兩三分貳朱
浅田竹三郎拝借地	京間 拾間	公役金	金五兩貳分貳朱
数寄屋町	京間 百貳拾五間四尺貳寸六分	公役金	金拾兩三分三朱
減少分			
万町	京間 六拾貳間半	公役金	金拾五兩
元四日市町	京間 拾七間半	公役金	金貳拾貳兩三分
日本橋蔵屋敷	田舎 貳拾壹間壹尺五寸	公役金	金四兩
青物町	京間 九拾四間	公役金	金九兩

図2 名主又右衛門の支配町々

以上のように支配領域の面で検討した結果、名主の支配町々は確かに増えているが、実際の代地による拡張を調べるため名主の収入である名主役料を検討したい。まず、増加した町々に対する役料は40両3分1朱で、

減少した町々に対する役料は50両3分で、実際の収入は10両程が減少していることが読み取られる。又右衛門は少し離れている万町、元四日市町、日本橋蔵屋敷、青物町の支配を他名主に預け、新しく広小路にできた町々を支配することになる。ここで他名主に預けた時期と、新しい町々の支配を始めた時期（元禄11年）の前後が把握できていないが、名主の支配町々をめぐってある程度の調整があったのではないかという推測ができる。又右衛門の場合、支配町々の入れ替えのなか、一定の収入を維持していたことがうかがえる。

2）当町の代地を通じた拡張

七番組の名主である永沢嘉左衛門（以下、嘉左衛門）の支配町々は永沢町、幸町、松屋町、日比谷町、永島町と記されている（元文3年町鑑により）。それが、安永3年町鑑には幸町、長沢町、永島町、松屋町、同町代地、同所伊藤宗印拝領屋敷、松屋町続上納地三ヶ所と支配町が若干増えてはいるがほとんど変わりはない。しかし『御府内沿革図集』の元禄期を検討すると、幸町と日比谷町が新橋の南側にあり、元禄3年（1690）に明地として収公され、八丁堀に代地が与えられている。その後、近隣にある長沢町と松屋町、永島町も支配下に置かれる²⁵⁾。この場合は幸町全体と日比谷町一部が明地になり、代わりに八丁堀の当地が代地として与えられ、八丁堀での支配を拡張したことが読み取られる。これは享保以前の拡張が目立っており、その後も松屋町の代地や上納地、拝領屋敷を用いて拡張をつづけることが確認できる。

表3 名主永沢嘉左衛門の名主役料²⁶⁾

支配町名	小間間数（京間・田舎間）	役種類	名主役料
幸町	京間 九拾貳間貳尺貳寸九分	公役金	金拾五兩
日比谷町	京間 九拾六間四尺貳寸九分	公役金	金拾五兩
増加分			
長沢町	京間 八拾間	公役金	金九兩
永島町	京間 七拾間	公役金	錢拾八貫
松屋町	京間 六拾三間三尺六寸五分	公役金	金拾壹兩壹歩
松屋町上納地	京間 未詳	上納金	金三兩三歩
此下屋敷	京間 未詳	未詳	金壹兩壹歩
□島町一丁目	京間 未詳	未詳	金貳拾三兩貳分
同町二丁目	京間 未詳	未詳	金六兩壹歩
合計			金八拾五兩

以上、検討したように名主嘉左衛門の支配町々は確かに増えているが、実際の代地による拡張を調べるため名主の収入である名主役料を検討した

図3 名主嘉左衛門の支配町々

からうまれる松屋町代地、松屋町上納地などが増加分になる。それにしたがって、名主役料は金30両から85両に55両も増加することが確認できる。

以上のように、代地を通した名主の支配領域の拡張は二つの面から現れている。一つ目は他名主の支配下にあった代地を用いての拡張、二つ目は名主支配下町の代地が他地域に与えられ、近隣の町を支配することによる拡張である。このような二つの拡張パターンと拡張の時期、地域、名主役料を検討した結果、代地を用いた名主の支配拡張には以下の二つの点が読み取られる。

一つ目は代地を用いた名主の支配拡張と地域の関係である。両方とも代地の動向においては比較的に初期である元禄期に拡張が行われた。元禄期というのは代地の動向から見ると比較的に早い時期であるが、名主における支配町々拡大においては最も活発に行われた時期である。ところが、1) は名主の支配町々をめぐってある程度は調整をしながら拡張していたことがうかがえる一方、2) は1) より制限なく拡張している様子がうかがえる。このような結果は地域の差であると考えられる。1) は町人地のなかでも一番密度が高い地域で、拡張するにも名主同士の調整が必要であったのではないかと推測される。一方、比較的に外郭で武家地が多かった八丁堀地域を町地に入れ替える際は、名主の支配領域は1) より自由でできたと考えられる。

二つ目、支配町々と名主の収入の関係である。名主役専業により名主は支配町々から徴収する役料を主な収入としていた。名主役料は、町々の地主がその所持家屋敷の規模に応じて差出す町入用のなかから支払われた。つまり、名主は町支配役としての権威を、幕府から保障されていたとしても、実質的には町々の地主たちによって支えられていたものである²⁷⁾。したがって名主支配町々の拡張は名主の収入の増加に直接につながるわけである。

4-3. 名主の仕事と代地

前項では、名主は自分の収入に直接つながる支配町々を拡張しようとしたことが明らかになった。では、名主の支配領域に代地が入り、支配町々が増えることにより名主の仕事にはどのような変化がみられるのか。

1) 名主の役割

名主の基本的な仕事は触の伝達・徹底、土地の売買と相続、人別改め、町奉行所への出頭などがある²⁸⁾。南伝馬町の名主である高野家の日記である『日記言上之控』²⁹⁾は町々で起きた様々な事件を記録したものである。これによると、欠落(かけおち)、裁判、捨て子、行き倒れ、自害、犯罪等々の事件が起きた際、事件の管理、調査及び処理を行い奉行所に届け出ることも名主のしごとであった。

『日記言上之控』のなかでは、代地について、特別な記述はみられない。名主のしごとが代地であるが故に増えるということはなかったと見なしてよいだろう。

2) 代地における名主の仕事

い。名主嘉左衛門の場合は幸町と日比谷町の代地が当地域の八丁堀に与えられたことにより支配町々を拡張しているため、元禄期以後の増加分を調べる。元禄期を基準にすると、長沢町、永島町、松屋町をはじめ、松屋町

ところが、『撰要永久録』によると代地をめぐるいくつかの訴訟がみられる。『撰要永久録』の公用留によると通三丁目代地と南伝馬町の間で入用をめぐる証文³⁰⁾がある。内容は宝永七年(1710)通三丁目代地が南伝馬町に加わり、入用及び諸役を南伝馬町に出すべきであると訴え出たことで、正徳二年(1712)に「和睦」した証文である。このように名主高野氏には南伝馬町二丁目に通三丁目代地が混ざり込み、一つの町になるまでの諸訴訟に対するしごとは増えるだろうが、それ以外は代地であるからこそ、名主のしごとが増えることは無かったと考えられる。

以上のように、代地が引き起こす支配町々の拡大はしごとの量は大幅には増加せず、収入が増えるものであった。このような代地を通した拡大は名主を喜ばせることであったのは確かであるだろう。

4-4. 代地と名主番組

代地を支配領域に取り込むことで、名主は利益拡大を実現していたが、名主番組にはいかなる影響を及ぼしたのか。一番組と五番組を例として挙げながら、代地が名主番組にいかなる変化をもたらしたのかを検討する。以下の分析は『安永三年小間附北方南方町鑑』を基準にして、『御府内沿革図書』と『東京都市史稿』で元地と代地の移動を追跡した図4を基づいて行った。

図4 左：1 番組の領域 右：5 番組の領域

一番組の領域は日本橋北側の一帯であるが代地は十一番組と十二番組、七番組に与えられた。一番組は遠い場所に代地が与えられても、全て支配している。十一番組との境界の場合には一番組の領域が拡張する姿が窺える。七番組と十二番組に与えられた場合、名主番組は変えず、同じ1番組の支配下にある。

五番組の領域は京橋北側一帯である。代地は六番組と七番組に与えられるが、名主番組は変わらず、支配を行っている。ところが、五番組のなかには四番組からの代地が多数みられ、本来は四番組の代地であるが、名主番組を変え、五番組になった町があることがうかがえる。

以上の二名主番組の例から、代地による名主番組の変化は以下のように整理ができる。

代地1：名主番組が特定されていない、境界の地域に代地が与えられると、A番組はその領域を含むように拡張する。

代地2：A番組にある元地がB番組に代地を与えられると、代地はB番組の名主番組を取り込まれる。

代地3：A番組にある元地がC番組に代地を与えられると、番組を変えずA番組に含まれる。

図5 名主番組と代地

大野氏の研究³¹⁾

によると名主は番組内で結束しあい、「組合内」という意識を強く持つ。さらにこのような名主番組というのは簡単には変えられない堅い枠組みとして論じられている。『名主取締之部』

³²⁾によると、天保

14年（1843）の時点で複数の番組にまたがって支配をしている名主は八左衛門ひとりだけである。『名主取締之部』をみると「右八左衛門儀、拾九番組之内芝二本榎承教寺門前・同所上行寺門前右式ヶ寺門前地兼帯支配仕候、尤式ヶ寺門前二御用向有之候節者、拾九番組名主八左衛門与相認メ申候、都而御触并被仰渡其外組合名主共申合通達等之儀者、其組合限りニ取計来申候間、御差支之儀ハ無御座候（後略）」³³⁾と書かれていて、名主の支配町が二つの番組にまたがる場合、それぞれの番組を区別して町支配を行っていることがわかる。実際の支配は「名主支配切」より名主番組別にはたらいっていることがうかがえる。ところが、代地による名主番組の変化を検討するとまた異なる結果が得られる。代地によって「名主支配切」は名主番組という空間領域を超えることになる。それにしたがって、代地は名主番組の境界を変えるか、名主番組を変えるか、名主番組を変えず異なる番組に存在するかという三つのパターンで反応することが確認できた。このような現象から名主番組は堅く固定されていたわけではなく、代地を媒介に変動していたことがわかる。名主番組よりは代地を支配している名主が何番組の所属であるのかが重要で、名主番組という大きな枠組みのなかで、代地は名主により柔軟に動いていたことが考えられる。

5. むすびにかえて

本稿では、代地が与えられた際、名主の支配はいかに変化するかについて考察した。

『江戸町鑑』から代地の登場を調べると、実際に代地が与えられた時期より遅く登場することがわかる。ここから元地と代地が支配の観点からは一つの町として扱われ、徐々に代地が独立した町として扱われるようになったことが窺える。元文期と安永期における名主支配町々の変化からは、代地に関わる蔵地、上納地、買上地により名主の支配領域が拡張していたことが読み取れた。これは名主自身というよりは、所有地を収公された町人の与えられた代地に対する不満により自分の領域を確保しようとした結果の拡張である。

代地における名主支配の類型は、大別すると元名主が支配する支配継続型と他名主が支配する支配変化型があり、支配変化型は代地の259ヶ所のなか61ヶ所にすぎずほとんどが継続していることが窺える。名主の支配において距離は重要ではあるが、代地の場合では支配を維持しようとしたことが考えられる。このような代地によって名主の領域を拡張する際には二つのパターンがみられる。一つ目は他支配の代地を支配に取り込み拡張するパターン、二つ目は支配下の町が代地を与えられ、その代地により拡張するパターンである。両方とも代地により名主は支配町々を拡張していた

ことが明らかになったが、これがはたして名主にとって利益であったのか。『名主役料書上』で名主の収入と『撰要永久録』、『日記言上之控』で名主のしごとを比べた結果、代地による支配町の拡大は名主の利益拡大を引き起こしたことが確認された。代地による名主支配町々拡張は名主番組にはどのような変化をもたらしたのか。ここには三つのパターンがあり、名主番組の境界を変えるか、名主番組を変えるか、名主番組を変えず異なる番組に存在するかである。

名主にとって代地はどのようなものであったか。まず、距離が隔たつていても76%は支配を維持しようとする様子がうかがえる。名主のしごととしては元地との関係もあり訴訟などのしごとが増えているが、同時に収入も増えるため、結果的には代地による支配の拡張は利益であったと判明する。名主の権威というのが实际的に町々の地主たちによって支えられていたものであるからこそ、名主にとって地主が増えるということはその権威を強くさせることでもあったと考えられる。

以上のように、代地による拡張は個人である町人の領域の拡張から名主支配の領域の拡張まで、所有意志とそれにとまなう利益の結果として理解できる。その代地により支配名主さらに名主番組も変えることができた。代地は江戸の都市空間のみならず、その支配関係も再編成していたことが窺える。

注

- 1) 幸田成友「江戸の名主について」（『史学』2-4、1923年）、水江漣子「町名主」（西山松之助編『江戸町人の研究』第四巻、吉川弘文館、1975年）、南和男「江戸名主の代替りについて」（『国学院雑誌』80-11、1979年）、中村静夫「江戸名主の住居」（『古地図研究』11-4、1980年）等。
- 2) 西山松之助「江戸の町名主斎藤月岑」（西山松之助編『江戸町人の研究』第四巻、吉川弘文館、1975年）、加藤貴「寛政期江戸名主の経済状況」（『日本史攷究』、文献出版、1981年）、大野祥子「江戸における名主の性格とその意義—名主組合を中心にして—」（『論集きんせい』第14号、近世史研究会、1992年5月）、加藤貴「江戸の家屋敷売買と名主」（『日本史攷究と歴史教育の視座』、日本史攷究、2004年）、吉田伸之「近世巨大都市の社会構造」（東京大学出版会、1991年）、小林信也「天保改革と江戸の名主」（『江戸の民衆世界と近代化』、山川出版社、2002年）
- 3) 奥村玉華子『名主惣鹿子名所大全』（渡辺書店、1973年）
- 4) 加藤貴『江戸町鑑集成』第一巻（東京堂出版、1989年）参考。
- 5) 「名主役料書上」（『旧幕府引継書』、国会図書館所蔵、安政期）
- 6) 『安永三年小間附北方向町鑑』上（東京都公文書館、1990年）p. 155。
- 7) 吉田伸之「名主」（『日本都市史入門』キーワード、東京大学出版会、1990年）。
- 8) 注7）前掲書。
- 9) 片倉比佐子『大江戸八百八町と町名主』（吉川弘文館、2009年）pp. 147-148。
- 10) 注9）前掲書、pp. 147-148。
- 11) 『御府内備考第』第一巻（『大日本地誌大系14』、雄山閣、1958年）から読み取った佐久間町四町目の空間構成を『御府内沿革図集』の上に書いたもの。
- 12) 注6）前掲書、上、pp. 153-154。
- 13) 『御府内備考』第一巻（『大日本地誌大系14』、雄山閣、1958年）p. 170。
- 14) 注6）前掲書、上、p. 153。
- 15) 注6）前掲書、上、p. 154。
- 16) 注6）前掲書、上、pp. 153-154。
- 17) 注13）前掲書、p. 170。
- 18) 注6）前掲書、上、参照。
- 19) 『撰要永久録』公用留66件（『日本近代立法資料叢書32』、商事法務研究会、1987）
- 20) 注6）前掲書、上、p. 47。
- 21) 注6）前掲書、下、p. 144。
- 22) 注6）前掲書。
- 23) 『御府内沿革図集』によると元禄11年に記されている。
- 24) 注5）前掲書と注6）前掲書を用いて作成した表である。
- 25) 『東京都の地名』（『日本歴史地名大系第三巻』、平凡社、2002年）p. 282。
- 26) 注24）と同様。
- 27) 加藤貴「寛政期江戸名主の経済状況」（『日本史攷究』、文献出版、1981年）p. 314。
- 28) 注9）前掲書、pp. 112-122。
- 29) 『南伝馬町名主高野家日記言上之控』（東京都公文書館、1994年）
- 30) 注19）前掲書、26件・44件。
- 31) 大野祥子「江戸における名主の性格とその意義—名主組合を中心にして—」（『論集きんせい』第14号、近世史研究会、1992年5月）。
- 32) 『大日本近世史料』市中取締類集「名主取締之部4」167件（東京大学出版会、1969）
- 33) 注33）前掲書。

（2010年8月16日原稿受理、2011年2月7日採用決定）